

第9回心の相談コロキアム：  
こどものこころの今～個性と成長に添う～：  
発達検査モニター事業から見える子どものこころの  
今

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4781">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4781</a>

# 発達検査モニター事業から見える 子どものこころの今

坂田 浩之

臨床心理学専攻准教授・カウンセリングセンター相談員

## I はじめに

大阪樟蔭女子大学カウンセリングセンター（以下“カウンセリングセンター”と略記する）では、2005年度から（引野，2009）現在まで発達検査モニター事業を展開してきている。筆者は2年間発達検査モニター事業の運営を担当してきた。本稿は、担当者としてこの事業に携わってきた立場から、本事業の説明と、本事業における心理臨床的関わりが子どもの心に持つ意味、さらには事業運営から垣間見えてきた子どものこころの今について伝えることを目的としている。

## II 発達検査モニター事業の概要

まず、発達検査モニター事業について説明する。この事業は、カウンセリングセンターの相談研修員（本学臨床心理学専攻に所属する大学院生）を臨床心理のプロ（臨床心理士）に育てるための教育・訓練として、また、その教育・訓練の成果を社会のために役立てたいという思いを実現するために、始まったものである。具体的には、カウンセリングセンターのある奈良県香芝市を中心に、チラシ、ホームページなどによって、“お子さんの発達について理解を深めるための検査を受けていただくモニター親子を募集しています”という広報を行い、応募者に、相談研修員が、本専攻の教員の指導や、カウンセリングセンター相談員のサポートを受けながら、発達検査とそのフィードバック、そして希望によってはフォローアップ（プレイセラピー）を実施している。広報の際にも明示しているが、この事業の理念・目標は、“お子さんのよいところを再発見し、発達を応援することに役立つ情報を提供いたします”というものである。

次に、発達検査モニターに応募したときの、実際の流れについて説明する。概要は下記の通りである。すなわち、①電話・ホームページによる申し込み・受付、②検査日時の決定・連絡、③モニターの子ども・保護者来室、④モニター申込票記入、⑤保護者面接（子どもはプレイルームで相談研修員の関与観察のもとで自由遊び）、⑥発達検査実施（保護者は待合室にて待機）、⑦フィードバック日時の決定・予約、⑧教員による指導のもとでの検査担当者による結果の吟味、⑨モニターの子ども・保護者再来室、⑩発達検査の結果と検査場面・自由遊び場面の印象の報告（フィードバック）、⑪モニターの希望に応じたフォローアップの実施、である。

ちなみに、⑪のフォローアップは、2007年度から始められており、⑩のフィードバックを聞いて、保護者が子どもの発達のサポートを希望された場合は、相談研修員が担当する1回50分間のプレイセラピーを10回まで、通常より低い料金で行っている。

実施している発達検査は、主に新版K式発達検査2001であるが、モニターの子どもの年齢や保護者の要望によっては、WISCⅢを実施する場合もある。また、これらの発達検査を実施する前に、人物画テスト、ないしはバウムテストを実施し、その子どもの発達や心理状態をアセスメントするための補助資料としている。

## III 発達検査モニターのデータ

次に、最近2年間（2008～2009年度）のデータに基づいて、今、発達検査モニターとして、どのような子どもがどれ

くらい訪れているかについて明らかにしたい。

発達検査モニターの子どもの年齢は、1:02~14:03である。年間応募件数は、約30件である。応募のきっかけは個々の場合で様々で、医療機関で広汎性発達障害(自閉症)の診断を受けている方もいれば、“(広汎性発達障害と定型発達との)グレーゾーン”と言われたという方、あるいはそのようなことは言われたことはないが子どもの発達の様子を知りたいという方もいる。

#### IV 発達検査の結果を見て思うこと

筆者は、年間約30件の発達検査の結果を、検査を担当した相談研修員と一緒に見て、それぞれの結果が意味するところをどう理解したらよいかを吟味している。結果の意味を理解するためには、そもそも発達検査が何を明らかにしているのかを理解しなければならない。したがって、発達検査が明らかにするものを相談研修員達に指導することになるが、そのときに筆者が強調しているのは、発達検査とは、その子どもが、今の時点で、同年齢の子ども達の中でどの程度早く発達していたり、ゆっくり発達したりしているかを明らかにするものであるということである。言い換えると、発達検査とは、必ずしもその子どもの生まれつきの能力の高さを明らかにするわけではないということである。

また、いろいろな子どもの発達検査の結果を見ながら改めて実感するのは、発達のスピードには個人差があり、誰にでも多少は、早く発達しているところとゆっくり発達しているところ(発達の凸凹)があるということである。特に、発達検査モニター事業で多く用いられる新版K式発達検査2001の場合、通過年齢は50%が基準であることから、その印象は強くなる。つまり、たとえば3歳の課題とされている検査課題は、3歳の子どもの約50%ができるものである、ということの意味している。反対に言うと、その課題は3歳の子どもの約50%はできないということである。そうなると同じ3歳の子どもであっても、同じ3歳級の課題ができたり、できなかったりということが容易に生じてくるということになる。

加えて、広汎性発達障害の可能性について検討するときに重要なポイントとなる、社交性や感情の発達は、検査中のやりとりの様子からは見えても、結果からはクリアに見えないということも実感される。そのため、広汎性発達障害について検討するときは勿論、そうでないときも、検査中のやりとりの様子や、上記②の自由遊びの関与観察の記録も、それぞれの子どもの検査結果の意味するところや、発達の様子を吟味する上で、大切にしている。

#### V フォローアップで心がけていること

発達検査モニター事業の一環としてフォローアップ(プレイセラピー)の実施を始めてみると、実に多くの方が希望してきた。そして、希望に応えるべく、相談研修員達も精一杯、真摯に取り組んでいる。筆者が、相談研修員のフォローアップをスーパーヴィジョンする中で、あるいは事業担当者としてフォローアップをマネジメントする中で、子どもの発達をサポートする上で、以下のようなことを強調することが、大切ではないかと考えるようになっていく。

すなわち、“発達する”ということは、ただ単に遺伝的なプログラムに従って成長するというのではなく、“発達する”ということの中には、他者との関係(社会)に適応していく(合わせていく)という動きが含まれているということである。たとえば、離乳に関して、かつては1歳になるまでにした方がよいと言われていたのが、最近は自然に飲まなくなったときでよい(子どもが好きなら飲ませたらよい)と言われるようになるなど、発達の里程碑はそのときの社会・文化のスタンダードによって異なるのである。

したがって、(身近ではない)誰かに合わせよう、合わせたいというところの動きが、それが意識的であっても、無意識的であっても、発達の原動力になるということが考えられる。フォローアップが狙っているのは、こころとこころを合わせようと歩みよることで、この発達の原動力を活性化させることである。

ここで、(身近ではない)誰かといっても、同年齢の子どものコミュニケーションは案外難しい。今の学齢期や

思春期の子ども達の同年齢の子どもとのコミュニケーションの難しさは、石田 (2011) や岩宮 (2009) が指摘する通りであるが、幼児期の子どもにも同様のことが言える。

そこで、フォローアップを担当する相談研修員が、子どもにとって最も身近な親・家族と、コミュニケーションの難しい同年齢の子どもとの中間的な存在となり、つかず離れずの関係を築くことが、意味を持つと考えられる。すなわち、①身近でないが、コミュニケーションがさほど難しくない他者が、子どものころと限られた時間でも、じっくりとこころをこめて関わることで、②子どもが身近でない誰かと関わり合うのが楽しいことであることが体験的にわかり、他者との関係に合わせていくことに興味がわき、③そこから生じる身近ではない誰かに合わせよう、合わせたいというこころの動きが発達を促していくというプロセスが生じることが考えられる。

## VI まとめに代えて—子どものこころの今について—

最後に、発達検査モニター事業に携わる中で、筆者が子どものこころの今について考える際に、注意しておく方がよいと思うようになった点について以下に述べる。

現在、早く発達しているも、そのままずっと早く成長し続けるとは限らない。すなわち、神童が凡人になることもある。反対に、遅く発達しているからといって、そのまま発達が止まってしまうわけではない。すなわち、大器晩成ということもある(神田橋ら, 2010)。発達が遅れているところも、その人なりに、その人らしく発達していくのである。これらは今も昔も変わらないことだと考えられる。

しかし、今は、“早いのがよい” “普通なのがよい” と考えられすぎているのかもしれない。そんな忙しくて、ズレに厳しい今の世の中だからこそ、子どものこころと関わるときに、ほんのつかの間でも、“じっくり” “ゆっくり” “適度にゆるく” こころを使うことを大切にしていけることが意味を持つのではないだろうか。

## 文献

引野明子 (2009) : 第7回心の相談コロキアム—心理検査で何がわかるか— カウンセリングセンターにおける発達検査モニターの報告と健やかな子どもの発達に向けて 大阪樟蔭女子大学人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 3, 3-12.

石田文章 (2011) : 学校現場における子どものようすと課題 大阪樟蔭女子大学人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 5, 11-17.

岩宮恵子 (2009) : フツーの子の思春期—心理療法の現場から 岩波書店

神田橋條治・岩永竜一郎・愛甲修子・藤家寛子 (2010) : 発達障害は治りますか? 花風社